

神道フォーラム

神道国際学会会報
(平成24年秋号・第46号)

特定非営利活動法人
神道国際学会
〒132-0035
東京都江戸川区
平井5-22-9 田中ビル3階
電話: 03-3610-3975

http://www.shinto.org

神道国際学会第十六回「神道セミナー」を開催

世界における『古事記』研究の様相を探る

『古事記』撰録千三百年を記念して

『古事記』撰録千三百年を記念した本会主催の国際神道セミナーが九月三十日、東京都千代田区のスクワール麹町で開催された。年に約一回のペースで実施する「神道セミナー」の第十六回。チュービンゲン大学(ドイツ)同志社日本語センターのミヒヤエル・ヴァフトウカ所長が「ドイツ語圏の日本研究と独訳『古事記』について」、皇學館大学の本澤雅史教授が「日本における『古事記』の読まれ方」、麗澤大学の岩澤知子准教授

開会にあたり挨拶した三宅善信本会常任理事(金光教泉尾教会総長)は、『古事記』はいわば太古の国作りのテキスト。そして今、日本は内外とも困難な状況にあり、この新たな国作りが求められている時にこそ、新しい神話が必要だ」と述べ、本セミナーが日本人のアイデンティティを探る機会になるよう、期待を表した。

「神々の語源に踏み込んだ独訳の先学もいた」
ヴァフトウカ氏

「神代を以って人事を知った本居宣長」
本澤氏

会になるよう、期待を表した。『神々の語源に踏み込んだ独訳の先学もいた』

最初の講話者、ヴァフトウカ氏は、『古事記』を独訳した先学を紹介し、とくに独語圏における最初の翻訳者であるカール・フロレンツを取り上げ、

「神々の名称の語源的な解説にも踏み込んで日本神話を理解しよう」として、その業績を説明した。

二番目の本澤氏は、日本の歴史の中で『古事記』がどのように採り上げられ、読まれてきたかを通史的に概観し、とくに『古事記』の重要性を指摘した賀茂真淵や、「神代を以って人事を知った」という本居宣長などに視点



授(本会理事)が『古事記』における『女性的なるもの』、南開大学(中国)の劉岳兵教授が「中国における『古事記』研究について―周作人の漢訳『古事記』を中心に」と題してそれぞれ講話を行った。講話後は、菌田稔本会会長(京都大学名誉教授)をコーディネーターに質疑応答とディスカッションも行なわれた。総会司会は関西大学のアレキサンダー・ベネット准教授(本会理事)を当てた。

「日本神話の生命力の根源にある(むす)なる(女性性)」
岩澤氏

最後に登壇の劉氏は、周作人を含めた中国における学者・文化人の『古事記』や日本文化に対する理解のし方を取り上げ、その中で、一九二〇〜三〇年代の日中関係の変化にも触れながら、「日中関係のありようも変わって文化理解のありようも変わっていく」と話し、学問が国際政治の状況に左右されるジレンマに踏み込んだ。

「日中関係の変化が文化理解にも影響する」
劉氏

最後に登壇の劉氏は、周作人を含めた中国における学者・文化人の『古事記』や日本文化に対する理解のし方を取り上げ、その中で、一九二〇〜三〇年代の日中関係の変化にも触れながら、「日中関係のありようも変わって文化理解のありようも変わっていく」と話し、学問が国際政治の状況に左右されるジレンマに踏み込んだ。

今年度第二回理事会を開催 翌日に社員総会も

平成二十四年度第二回の理事会が九月二十九日、都内で開かれ、任期(二年)満了・改選を今年末に控える役員人事や、会務所の移転など、諸議案を討議した。議長は定款に則り、大崎直忠理事長が務めた。

役員改選については、現役員の留・退任の意思などが説明され、菌田稔会長、大崎理事長ほか数人の退任意向を確認した。あわせて、推薦のあった新役員候補者についても審議した。また、平成二十四年度の第二回社員総会が九月三十日、前日の理事会を受けて開かれ、平成二十五〜二十六年度の役員の内選任や会務所の移転など、諸議案を審議し承認した。議長は推薦により、茂木栄常たジョン・ブリン副会長も「本会も一つの節目を迎えているが、課題を切り開く責務を感じながら、会が発展するよう願っている」と、それぞれ話し、会員(社員)の協力を要請した。

役員改選については、現役員の留・退任の意思などが説明され、菌田稔会長、大崎理事長ほか数人の退任意向を確認した。あわせて、推薦のあった新役員候補者についても審議した。また、平成二十四年度の第二回社員総会が九月三十日、前日の理事会を受けて開かれ、平成二十五〜二十六年度の役員の内選任や会務所の移転など、諸議案を審議し承認した。議長は推薦により、茂木栄常たジョン・ブリン副会長も「本会も一つの節目を迎えているが、課題を切り開く責務を感じながら、会が発展するよう願っている」と、それぞれ話し、会員(社員)の協力を要請した。

また、平成二十四年度の第二回社員総会が九月三十日、前日の理事会を受けて開かれ、平成二十五〜二十六年度の役員の内選任や会務所の移転など、諸議案を審議し承認した。議長は推薦により、茂木栄常たジョン・ブリン副会長も「本会も一つの節目を迎えているが、課題を切り開く責務を感じながら、会が発展するよう願っている」と、それぞれ話し、会員(社員)の協力を要請した。

行雲流水

神道にも国際的共感を

音楽を、楽譜通りに正確に演奏するだけでは素人レベル。プロになれば観客を感動させるだけの演奏をしなければ、生き残れない。そのためにはテンポの作り方、強弱の付け方、間(マ)の取り方、ピアノならペダルの踏み方、弦楽器なら弓の使い方、声楽なら発声法など様々な要素がからむが、いずれにせよ人とは違う自分の音楽をどう作るかがポイントになる。

日本の伝統舞台芸術の場合はどうかというと、どちらかといえば演奏家が自分らしさを出すよりも、伝統に忠実かどうか物差しになることが多い。能、狂言、歌舞伎、神楽に至るまで、新しい解釈はごく一部の例外以外は異端視されがちである。神前儀式として位置づけられる神楽には、演者が観客を感動させるという考え方はもともと存在しないのかもしれないが、現在のようデジタル時代、CG全盛の視覚芸術が幅を利かせるなかでは、観客にも共感を覚えさせるような工夫を導入することが必要ではなからうか。

特に海外では、伝統芸能にかぎらず日本独自の芸術が、古来の伝統だけを頼りに観客に立ち向かっても、果てしない退屈さと理解不可能という嘆きが返ってくるだけであろう。それでも伝統をえ守っていればよい、というのでは傲慢、独りよがりのそしりを免れない。神道もその例にもれないのではなからうか。

世界に向けて神道の正しい姿を発信していく、という理念で発足した神道国際学会も、シンポジウムでただ歴史や伝統を並べるだけではなく、現代の社会で国際的な共感を作りだすための演出にもう少し力をそそげば、神道学者のみならず一般レベルの理解を増やすことができるはずである。理事長としての2年間の任期中にこの考え方を實現するに至らなかったのは力不足で申し訳ないが、次期役員、理事諸兄姉に是非このテーマを托せれば、という思いでいっばいである。

(大崎直忠)

議長を推薦し承認した。議長は推薦により、茂木栄常たジョン・ブリン副会長も「本会も一つの節目を迎えているが、課題を切り開く責務を感じながら、会が発展するよう願っている」と、それぞれ話し、会員(社員)の協力を要請した。

カリフォルニア大学サンタバーバラ校で国際シンポジウム開催 「自然災害と宗教文化 (The Sacred and Natural Disasters)」

秩父神楽団一行も民間交流に大活躍



学術交流に民間交流に成功をおさめホッとして記念写真。前列左から茂木教授、大崎理事長、梅田事務局長、ランベツリ教授、菌田会長、三宅常任理事、ハイヴンス教授、守屋秩父神社権禰宜。後列は秩父神楽団一行。

米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校(以下UCSB)に神道国際学会が設立した神道学講座の十五周年を記念するイベントが、平成二十四年十一月一日から三日間行われた。

この一連のイベントは、平成二十三年三月十一日の、東日本大震災の犠牲者への鎮魂をこめて、今年二月に大船渡市のリアスホールで開催した、神道国際学会とケセンきらめき大学共催の国際シンポジウム「災害と郷土芸能」の延長線上にあり、アメリカでも地震多発地域であるカリフォルニアで、自然災害と宗教文化について意見交換をしようとするものである。おりしも大型ハリケーン「サンディ」がニューヨーク地方を襲った時であった。

この催しは、UCSBと神道国際学会が共催、ニュー

神道学講座十五周年奉告祭

初日の十一月一日には、UCSB人文科学センターにおいて神道学講座設立十五周年記念式典が、菌田会長を祭主、随神楽団の守屋通夫氏が祭員として、また梅田節子神道国際学会事務局長が典儀をつとめて、奉告祭式次第に基づき行われた。

レセプションが、UCSB神道学講座は、当時の神道国際学会会員によりかけて寄付を募り、世界で初めて海外の大学で神道学講座を開いたもので、初代の主任教授には、米国における神道研究の第一人者であるアラン・グラパール教授があつた。

ヨークに本部を持つインターナショナル・シンクトウ・ファウンデーション(ISF)協賛のもとに実現したものである。

日本からは神道国際学会の菌田稔会長(京都大学名誉教授)をはじめ、常任理事の茂木栄國學院大学教授、同じく常任理事の三宅善信金光教皇尾教団長、それに国指定重要無形民俗文化財の秩父神社神楽団一行ら、計十三名が参加。UCSB側からは今回のイベントの準備を一年半にわたって進めてきたフアビオ・ランベツリ東アジア言語文化研究学部長兼神道学講座主任教授が全面的にかかわり、それを四人の大学院生が献身的に支えていた。

(報告・大崎直忠神道国際学会理事長)

た。ランベツリ教授は主任教授としては二代目で、神道学講座は、教授の指導のもと順調に活動を続けている。

民間交流に活躍する神楽団

二日目午前中は、UCSB音楽学科の民俗音楽部教室で、「世界の音楽」の授業の一環として、神楽の音楽と舞踊に関する講義および秩父神楽の実演が行われ、同僚部の教職員及び学生約二百人を幻想の世界に導いた。

その後一行は、地元のヴィエハ・バレー小学校に招かれた。低学年の生徒たちと一緒に給食のピザをこ馳走になった後、全生徒約三百人を低学年、高学年の二つのグループに分けて神楽の舞と音曲を披露し、大喝采を浴びた。

更にサンタバーバラに住む日本人および日系人の子弟が通う「サンタバーバラ日本語継承語学校」を訪問。

この学校は、同市に在住する日本人の父兄が、子ども達の日本語能力を保つために、主に母親達が主体となって自主的に運営しているもので、ここでは子供たちと父兄約四十人を前に「天手力命の舞」を見せたが、日ごろ日本の伝統文化に触れることのない子供たちや父兄の中には感動して涙を流すものがあったほどであった。

活発な国際シンポジウム

最終日の午前中には、人文科学研究所で「自然災害と宗教文化(The Sacred and Natural Disasters)」と題する公開国際シンポジ

現役員の任期満了にともなう留・退任について

第一面に掲載の通り、神道国際学会役員は今年末に任期満了を迎える。役職の互選と、新たに加わる役員については、十一月の理事会・社員総会で討議・決定されるが、現時点における現役員の留・退任は次の通り(順不同)。

菌田稔理事〓退任(顧問に就任、大崎直忠理事〓退任、ジョン・グリーン理事〓留任、三宅善信理事〓留任、茂木栄理事〓退任、岩澤知子理事〓留任、ムケンゲシャイ・マタタ理事〓留任、アレキサンダー・ベネット理事〓留任、栗本慎一郎理事〓留任、王勇理事〓退任、マイケル・パイ理事〓留任、マーク・テーウエン理事〓留任、ベール・ナル・フオール理事〓退任、玉川千里監事〓退任。

来年一月からの本会の新事務所について

第一面に掲載の通り、神道国際学会の事務所は平成二十五年一月一日付で現住所から新住所に移転する予定。新事務所の住所その他は改めて通知する。

会長退任のご挨拶

菌田 稔



平成24年度をもって会長の任を勇退するに当たり、本学会の役員並びに会員各位に対し、ひとこと退任のご挨拶を申し上げます。

早いもので、平成6(1996)年夏に本学会の設立準備委員会が開催されて以来、実に18年のあいだ本学会の諸活動に携わって参りましたことに改めて深い感慨を覚えております。

当初は、平成5年秋に成就した伊勢神宮の第61回式年御遷宮を奉祝して開催された「千年の森に集う」という大規模な国際シンポジウムなどで知遇を得た宗教団体ワールドメイト代表の深見東洲氏の呼びかけに応え、当時の錚々たる学者文化人の顔ぶれの末席に加わったのがきっかけで、まさか以来10年後の平成17年から今日まで8年のあいだ会長の任に就こうとは夢にも思いませんでした。

それというのも、本学会の設立が深見東洲氏の深い思い入れで、日本の神道文化が特に戦後の国内と海外で誤解と偏見に災いされて本来の姿が学問的にも多角的に研究されていないことを憂慮されての純粋たる学会設立の呼びかけであることを見極めての参画でありましたし、また当初から理事長の大役に就かれた、今は亡き梅田善美氏の国際感覚豊かで度量の大きい実行力を深く信頼しての活動参加であったからでした。

これまで初代の会長を10年間務められた中西旭先生を亡くし、副会長の米山俊直先生にも先立たれ、後任のアラン・グラパール先生も健康を理由に副会長を退任された上に、最も頼りにした盟友、梅田善美前理事長を喪った現状では、今後の本学会の再編成を期して後進に責を譲るべきと心得た次第です。本学会の今後益々の発展を心から念じ上げます。



ウムが開かれ、開会では、ワシントンDCからアメリカ大陸を横断してかけつけた、キャサリン・マーシャルI SF理事も挨拶した。

講師陣には、神道国際学会から派遣された講師のほか、同学科のドミニク・ステアーヴ助教授、歴史学部のステファニー・トゥティノ教授などが国際シンポジウムにスピーカーおよびパネリストとして加わった。

神道研究者のみならず外部からの参加者も見られ、各スピーカーのプレゼンテーション、質疑応答、パネリストのディスカッションに熱が入ったあまり、予定の時間を大幅に超えて、昼食のレセプションの時間まで使う事になる程であった。

シンポジウムの皮切りは、菌田会長の「カオスとコスモス：震災復興の宗教文化」というプレゼンテーション

だったが、災害時における日本人の冷静かつ秩序ある行動が長い歴史の中で育まれた地域社会の伝統として根付いていること、神社仏閣の災害の被害が限定的であったこと、宗教団体による救援活動が被害者を勇気づけ、さらに災害からの復興の中で神楽のような伝統的文化行事が被害者たちの力になった事例などを挙げて説明した。

茂木常任理事は「津波被害と神社についての信仰的解釈」というタイトルでプレゼンテーション。七十枚以上のスライドや動画を交えながら、津波の被害を受けた地域で神社および神事芸能が積極的に被害者の復興への力となってきた事例を説明した。



サンタバーバラ日本語継承語学校で神楽公演

行動をとることを学び、他の国で見られるような暴力行為や略奪が起らないのは、歴史の中で身につけてきた生活の知恵であり、生き残りのための方法であることを強調した。

ランベツリ教授は「地震の神学：前近代日本における自然災害と宗教文化」のプレゼンテーションで、石原慎太郎前東京知事が日本の政治混迷を「天罰ですよ」と切つて捨てた例を挙げ、日本人の偶像崇拜の延長線上にある「神の罰」という概念が日本人の倫理観を支えており、同時に災害時においても他人に対する慈しみ憐みの気持ちを育ててきていると云う解釈を披露した。

ステアーヴ助教授は「終焉の大洪水：中国宗教史における終末と元初」という講演で儒教の終末論、災害予告には人々が災害を天の声として利用し、復活への足掛かりとしてきたことを説明。

三宅常任理事は「災害ユートピアと宗教」と題する講演の中で、地震その他の自然災害の見舞われること多い日本では、人々が自然に秩序正しい

りにも大きいテーマなので、これをパネルディスカッションに切り替えることとし、六人のスピーカーの間で様々な議論が行われたが、最終的には復活への「世直し」とは全く新しいものに切り替えるのではなく、元の形にある程度戻るといふ意味合いが強いというあたりで結論になった。

最後のプログラムは同日夜の八時から、多文化センター劇場での神楽公演で、約二百席の劇場をうめた観客は、二時間近い多彩な神楽の演奏に満足したためかアンコールのコールまで出た程であった。

今回のイベントでは秩父神楽の太鼓、小太鼓、長太鼓、横笛に踊り手という六人のアンサンブルが、合計五回の演奏で大活躍されたことを特筆しておきたい。

神楽団の新井力也氏は、平成十三年に豊前山内神

りにも大きいテーマなので、これをパネルディスカッションに切り替えることとし、六人のスピーカーの間で様々な議論が行われたが、最終的には復活への「世直し」とは全く新しいものに切り替えるのではなく、元の形にある程度戻るといふ意味合いが強いというあたりで結論になった。

最後のプログラムは同日夜の八時から、多文化センター劇場での神楽公演で、約二百席の劇場をうめた観客は、二時間近い多彩な神楽の演奏に満足したためかアンコールのコールまで出た程であった。

今回のイベントでは秩父神楽の太鼓、小太鼓、長太鼓、横笛に踊り手という六人のアンサンブルが、合計五回の演奏で大活躍されたことを特筆しておきたい。

神楽団の新井力也氏は、平成十三年に豊前山内神

りにも大きいテーマなので、これをパネルディスカッションに切り替えることとし、六人のスピーカーの間で様々な議論が行われたが、最終的には復活への「世直し」とは全く新しいものに切り替えるのではなく、元の形にある程度戻るといふ意味合いが強いというあたりで結論になった。

最後のプログラムは同日夜の八時から、多文化センター劇場での神楽公演で、約二百席の劇場をうめた観客は、二時間近い多彩な神楽の演奏に満足したためかアンコールのコールまで出た程であった。

今回のイベントでは秩父神楽の太鼓、小太鼓、長太鼓、横笛に踊り手という六人のアンサンブルが、合計五回の演奏で大活躍されたことを特筆しておきたい。

神楽団の新井力也氏は、平成十三年に豊前山内神



秩父神楽について解説する菌田宮司

UCSB 神道学講座のファビオ・ランベツリ教授に聞きました

——ランベツリ先生が今回の一連のイベントを思いついたそもそものきっかけはなんだったのですか。

——二〇一〇年の夏、UCSBの第二代「神道研究講座」担当教授として赴任した時から、UCSBでの神道研究および日本宗教思想史の研究を活性化させるために、様々な活動をしてきました。そのなかには、新しいカリキュラム、講演、シンポジウムの後援、そして新しい大学院生の受け入れなどがありました。

しかし、今回のイベントシリーズは私の活動の中で、もっとも大規模な企画です。神道国際学会会長の菌田先生を始め、学会の代表的な人物が、UCSBの有力の若手研究者といっしょに、「自然災害と宗教文化」という幅広いテーマを取り上げることで、日本の宗教文化、とりわけ神道の世界の理解へ貢献するとともに、私たちUCSBと神道国際学会をいっしょに強化したいという思いが込められています。

また、国際シンポジウム「自然災害と宗教文化」は、この重要な観点から文化と自然との絡み合いを考え直すとともに、大震災の後の東北の再建



——先生のところは家族ぐるみで手伝ってくださいましたね。とくに「ご長男のジュリオ君のけなげな働きぶりに感激した」という神楽師さんいました。全てが無事に終わった現在の感想はいかがですか。

——正直言って、かなり疲れました(笑)。だけど、チャンスがあればもう一度、やりたいです。これからは、講演やシンポジウムだけでなく、やはり「生き文化」(芸能、音楽、芸術など)を積極的に紹介したいと思っています。

このたびのイベントは、神道や宗教文化の専門家だけでなく、大学生、小学生、一般市民へ対する魅力的な催しでした。UCSBやサンタバーバラ市内でも相当の反響がありましたし、神道の世界および日本の宗教文化全般に対する関心が高まり、より正確な理解を促す貴重なきっかけとなったと喜んでいきます。

——先生のところは家族ぐるみで手伝ってくださいましたね。とくに「ご長男のジュリオ君のけなげな働きぶりに感激した」という神楽師さんいました。全てが無事に終わった現在の感想はいかがですか。

——正直言って、かなり疲れました(笑)。だけど、チャンスがあればもう一度、やりたいです。これからは、講演やシンポジウムだけでなく、やはり「生き文化」(芸能、音楽、芸術など)を積極的に紹介したいと思っています。

このたびのイベントは、神道や宗教文化の専門家だけでなく、大学生、小学生、一般市民へ対する魅力的な催しでした。UCSBやサンタバーバラ市内でも相当の反響がありましたし、神道の世界および日本の宗教文化全般に対する関心が高まり、より正確な理解を促す貴重なきっかけとなったと喜んでいきます。

連載・神道 DNA

『万機公論に決すべし』

金光教泉尾教会総長
(株)レルネット代表
三宅善信

接戦と言われたアメリカの大統領選挙は、オバマ大統領の再選で幕を閉じた。一方、中国では、戒厳令の下で共産党大会が開催され、相も変わらず十三億の民の意思とは関係ないところで、今後十年間の国家指導者が選出された。

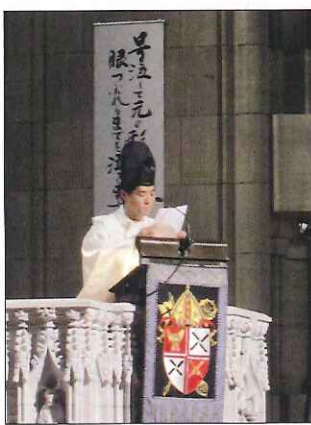
神ならぬ人の身ゆえ、いかに優秀な政治指導者であったとしても、人間は必ず間違いを犯す。ましてや、年々猛烈化する自然災害は言うに及ばず、複雑化グローバル化した世界金融市場において、いつどこでどのような「危機」が発生するやら、予測することすら困難である。だから、指導者にその失敗の結果責任を取らせ、常に国家運営の軌道を修正してゆくために「選挙」が行われるのである。その意味で「民の声は神の声」なのである。それを「近いうちに…」などと言って、徒に自己の政権の延命を図ろうとするなど、もつてのほかである。

私は、十月末と十一月初めに、南アフリカ共和国とアメリカ合衆国を相次いで訪問した。南アでは、ヨハネスブルグで開催された第四回 I F A P A (アフリカの平和のための諸宗教行動) サミットに出

席し、米国ではカリフォルニア大学サンタバーバラ校 (UCSB) で開催された国際シンポジウムに参加した。UCSB で開催された国際シンポジウム「自然災害と宗教文化」の詳しい内容については、本紙上で詳解されているので、ここではあらためて述べないが、南アの I F A P A サミットは出色の会議であった。

や食糧危機で選挙どころではない中央アフリカ諸国や、十年前に「アパルトヘイト」(人種隔離政策) を撤廃した豊かな南アフリカ共和国から、つい昨年、「アラブの春」と称せられる民主化運動によって、長期にわたる独裁政権が相次いで崩壊したチュニジア・エジプト・リビア等の北アフリカ諸国に至るまで、政権の正統性を国際社会から認知されるためにも「自由で公正で民主的な選挙」を実施することが必須の条件であるが、その一方で、北アフリカのイスラム諸国に見られるように、もし「自由で公正で民主的な選挙」が実施されたら、当然、国民の大多数を占めるイスラム教徒が、宗教法である「シャリヤ」を国家の世俗法の上位に採用するように求めるであろうから、当該地域に暮らす少数民族の非イスラム教徒にとっては、極めて不自由な政治体制となる。

しかし、今回の I F A P A サミットでは、言語や民族や宗教や経済状況が様々に異なるアフリカ各国の宗教指導者たちが、地に足の着いた、なおかつ普遍性を有するハイレベルなディスカッションを展開したのを見たのは、三十年以上諸宗教対話の世界に身を置き、世界各地で何百回とこの種の会議に参加した経験を持つ私でさえ、大変勉強になった。現時点では経済的繁栄を



式典ではまず仏教・キリスト教・神道の日本人聖職者がそれぞれの宗教に則り会場に設けられた祭壇に祈りを捧げた。中西オファイサーも神職として原爆犠牲者を慰霊する祝詞を奏上し、こういった残酷な核兵器による犠牲は二度とあつてはならないと訴えた。



式典ではオファイサーが斎主として会場に参列した子供たちの幸せや健康を祈る祝詞を奏上した後、参加者の子供の名前を一人ずつ読み上げると、子供たちは順番に両親と祭壇のあるステージに上がり、

謳歌しているように見える東アジアの独裁国家よりも、確実に民主主義の成熟を目指すアフリカの将来は明るいを見た。その数日後、UCSBでの国際神道シンポジウムの公演に立ち会ったが、訪れた小学校の低学年では、その時「学級委員長」の選挙を行っていた。学校給食として宅配のピザを供していたのには驚いたが、それ以上に感心したのは、日本の小学校なら、児童自身による立候補の意思表示や選挙運動もなく、新学期になると自動的に学級委員長選挙の投票が行われ、黒板に「正」の字を書いていって、「人気投票」のごとく最多得票数を得た児童が学級委員長に当選するのが一般的だが、アメリカのそれはまったく違っていた。立候補した子供たちが「公約」を発表し、候補者同士でディベートを行い、一週間というキャンペーン期間中、クラスメイトたちが自らの支持する「候補者」への投票を呼びかけるワッペンを胸に貼って、「選挙運動」を繰り広げるのである。まさに「万機を公論に決す」文化である。

八月五日、ニューヨークのセント・ジョン大聖堂で広島・長崎原爆投下犠牲者を慰霊する祈念式典が開かれ、ISFからは中西オファイサーが参加した。式典ではまず仏教・キリスト教・神道の日本人聖職者がそれぞれの宗教に則り会場に設けられた祭壇に祈りを捧げた。中西オファイサーも神職として原爆犠牲者を慰霊する祝詞を奏上し、こういった残酷な核兵器による犠牲は二度とあつてはならないと訴えた。

十一月三日、四日の両日、ニューヨーク市ジャパン・ソサエティオーデトリウムにて毎年秋の風物詩である第十三回国際七五三行事が執り行われた。今年には式典直前の NY にハリケーン「サンディ」が到来し、式典当日も市内各地で停電、冠水する中でキャンペーンも相次いだ。それでも百名を超える児童を含めて三百名以上の参列者が、交通機関が麻痺する中、わが子の一生に一度の晴れの日のため来場した。またそのような状況にも関わらず両日二十名ずつボランティアが駆けつけ、受付・着付・誘導や式典の巫女などとして手伝っていた。

二礼二拍手一礼の神道作法に則り御神前にお参りした。参拝を終えると子供達は「褒美に巫女から千歳飴を笑顔で受け取った。祭典後はそれぞれの参加者が家族と共に順番にステージに上がり、斎主、巫女と記念撮影を行ったが、笑顔で写真に収まったり泣き出す子もいたり会場は終始賑やかであった。今年も参加費の一部がユニセフ(国連児童基金)に寄付され、世界の恵まれない子供達の教育や生活の為に使われる。

インターナショナル・シントウ・ファウンデーション (ISF) 便り



広島・長崎原爆慰霊祭

望」と題した東日本大震災の被害と被災者の声、また広島・長崎の原爆被害を伝える展示会が開催され、多くの人々がその悲惨な展示に見入っていた。

NY 国際七五三行事

十一月三日、四日の両日、ニューヨーク市ジャパン・ソサエティオーデトリウムにて毎年秋の風物詩である第十三回国際七五三行事が執り行われた。



国宝・重文の一大宝庫 大山祇神社 国宝館・紫陽殿

大小の島々が浮かぶ景勝の地、瀬戸内は芸予海峡。今では広島側と愛媛側を、島を結んで快適な有料道路が走り、「しまなみ海道」と、ロマンチックに呼ばれる。海峡にちなむ島嶼のうち、ほぼ中央にひときわ大きな大三島(愛媛県今治市)がある。ここが古代より「神の島」と称されたのは、日本総鎮守ともいわれ、伊予国一の宮にも定められた大山祇神社がましますからだ。

◇ 原始を思わせる社叢に覆われて、三間社流造りの重厚な本殿をはじめ、殿舎や御神木の太木などがひっそりと鎮まっている。主祭神は天照大神の兄神である大山積大神。地神としても海神としても靈威を示し、朝廷、武家、民衆を問わず、広い層から尊崇を集めてきた。それを反映して多くの奉納品が献げられ、大山祇は一大神宝庫の観を呈している。

◇ とくに顕著なのが、鎧・兜・胴丸・太刀など武士奉納物で、全国の国宝・重文に指定される武具類の、じつに八割は、ここ大山祇神社にあるとされる。それら神宝をいかに多く拝観できるのが国宝館・紫陽殿。源義経奉納の「赤絲威鎧(大袖付)」、河野通信奉納の「紺絲威鎧兜(同)」、源頼朝奉納の「紫綾威鎧(同)」、護良親王奉納の「牡丹唐草文兵庫鎖太刀拵(いずれも国宝)」などに圧倒されるが、もちろん古図や文書など、その他の文化財も多数ある。ひときわ目を惹くのが、日本三銘鏡に数えられる「禽獸葡萄鏡」(国宝)で、これは斉明天皇の奉納物である。

◇ 太古の朝鮮遠征、中世初頭の源平合戦と、伊予水軍の活躍……。収蔵の品々は、瀬戸内が歴史の大きな舞台になったことを偲ばせてもくれるのだ。

◇ 海洋生物の研究に造詣の深かった昭和天皇のご業績を記念した海事博物館(動物植物や鉱山鉱石の標本などを陳列)が隣接しており、こちらも必見だ。

◇ 八時半から十七時。無休。大人一〇〇〇円。愛媛県今治市大三島町宮浦。電話〇八九七(八二)〇〇三二。

花崗岩造の重厚な建造物 金刀比羅宮 宝物館

全国にある「こんぴらさん」の、謂わずと知れた総本宮。航海安全の神様としても名高いが、とくに江戸時代以降は各地に「金毘羅講」がつくられ、庶民による金毘羅参りが活況を呈した。

◇ 参道は坂と石段が延々と続き、最初は両側の御土産屋さんやら、食堂やらをひやかしながら登っているが、大門に辿り着く頃には息が上がる。本宮、そして奥社はまだまだ上だが、大門で振り返れば眼下に琴平の町並みと讃岐平野が臨まれ、ホッと一息だ。

◇ その大門をくぐって百メートルほど行くと、参道からやや右側にあるのが宝物館である。和洋折衷の堂々たる二階建て。創建は明治三十八年、香川県産の花崗岩による造りだといふ。

◇ 太刀、甲冑、弓・矢も多いが、重文に指定される「木像・不動明王像」「木像・十一面観音立像」などもある。そういえば、ここ金刀比羅宮も明治初年までは神仏習合で、金毘羅大権現の本地仏は十一面観音なのである。

◇ 一階の「三十六歌仙額」も必見。人物容姿、衣裳美とも秀逸とされるのが素人目にも分かる。歌の揮毫は青蓮院尊純親王ほか十二人、絵は狩野探幽とその兄弟といふ。

◇ 宝物館を出れば、再び緩急あいまった石畳と石段が続き、書院や旭社を経て、ようやく御本宮へとお参りできるのである。ちなみに金刀比羅本教祖を祀る奥社・厳魂神社へはさらに約一キロ、五八〇余段の石段が控えている。

奉納武具や古鏡に瀬戸内の歴史を偲ぶ 神仏習合を示す仏像や「三十六歌仙図」

博物館情報

企画展・イベントなど

●東京国立博物館
【特別展】「出雲―聖地の至宝―」
一七五四―一七〇五九六
(二二)一七〇〇。

●天理大学附属・天理参考館
【第六十七回企画展】「蹴鞠 Kenari」
▽十一月三日まで
▽「日本書記」の時代から存在し、平安後期から鎌倉期の公家社会で洗練された様式に育て上げられた「蹴鞠」。その伝統「スポーツ」の様相を、装束、鞆、道具類から見る
▽九時半〜十六時半
▽火曜休館(休日の場合はその後の直近平日が休館)
▽大人四百円
▽奈良県天理市守目堂町二五〇
▽〇七四三(六三)八四一四。

●瀬戸内海歴史民俗資料館
【船主・網元の信仰展】
▽十二月二十八日まで
▽北前船や漁業船でにぎわった瀬戸内。恵みに感謝し、豊漁を祈り、危険から身を守るために、船には船霊を祀り、母屋には神棚を設け、さらには船給馬や船雛形を社寺に奉納し、恵比寿神やおオダンマサン(網霊様)を祀った。それら関連の信仰資料を紹介する
▽九時〜十七時
▽月曜休館(月曜が休日の場合は、原則として翌火曜が休館)
▽無料
▽高松市亀水町一四二二(二) 〇〇八七(八八二) 四七〇七。

●神宮徴古館
【神宮大麻頒布一四〇周年記念展】「神札(おふだ)」と伊勢信仰
▽十二月二日まで
▽かつて御師らによって配布された「お祓い大麻」が明治四年に廃止され、翌年、神宮司庁から「神宮大麻」が直接頒布された。その関連資料や大麻奉製工程、頒布活動を展示し、神宮大麻頒布への理解を図る
▽九時〜十六時半
▽月曜休館
▽大人三百円、高校生・大学生百五十円
▽三重県伊勢市神田久志本町

●神宮徴古館
【神宮大麻頒布一四〇周年記念展】「神札(おふだ)」と伊勢信仰
▽十二月二日まで
▽かつて御師らによって配布された「お祓い大麻」が明治四年に廃止され、翌年、神宮司庁から「神宮大麻」が直接頒布された。その関連資料や大麻奉製工程、頒布活動を展示し、神宮大麻頒布への理解を図る
▽九時〜十六時半
▽月曜休館
▽大人三百円、高校生・大学生百五十円
▽三重県伊勢市神田久志本町

神社界あれこれ

国無形重文指定から初の「坂越の船祭」

赤穂市の大避神社

帰省の若衆も盛り上げに一役

聖徳太子に重用された秦河勝を祀る大避神社（兵庫県赤穂市坂越、生浪島菟宮司）で十月十四日、参道下の浜辺から、坂越浦に浮かぶ生島（河勝の墓所が所在）まで十数隻の船で往復する「坂越の船祭」が行われた。三百年以上続く伝統行事。今年三月に国指定重要無形民俗文化財に登録されてから最初の「船祭」となり、多くの人が見守った。



↑ 大避神社の「坂越の船祭」
(奥に見えるのが生島)

正午すぎ、集落各地区の頭人らが参列して、本殿から分霊を神輿に遷す遷霊祭があり、続いて供奉行列に伴われて浜に降りた。大避神社は、渡来系の氏族である秦氏にまつわる伝

↓ 伊曾乃神社のだんじり巡行



「坂越の船祭」は、古来の和船を用い、巡行の際の船歌も古式を伝えて貴重といい、今春、国重文に指定された。今年指定を記念して、地元出身の若衆が全国から数多く帰省したとい

説や、河勝を祖とおく雅楽家とのつながりなどがあり、歴史研究の宝庫として注目を集めつつある。

西条市の伊曾乃神社

神輿とともに恒例の川入り、曳き手に留學生の姿も

愛媛県西条市の秋を次々と彩る「西条まつり」のうち、十月十五、十六日には、メインの伊曾乃神社（井上千賀司宮司）祭礼が斎行され、多くの人が出で賑わった。

だんじり七十七台、みこし四台が奉納されるとい

「スタートを切るため、ど

熊野本宮大社の九鬼宮司

熊野本宮大社は、故地、大斎原から現在の鎮座地への遷座から百二十年を迎えたのをうけ、来春の「奉祝正遷座百二十年大祭」に向けて御社殿・神門の修復、奉納行事などを着々と進めている。

昨年の大雨による大洪水で、宿坊の役割を果たしてきた瑞鳳殿が壊滅するなど、同大社でも被害の爪痕が残る。それでも九鬼家隆宮司は、「よみがえりの熊野」を念頭に、「それぞれが意識を持って、それぞれの役目を果たして、この新たな時を進んでいきたいもの」と話す。

やがて日がとつぷり暮れると、川を渡って宮入りしようとする神輿との別れを惜しみ、行く手をはばむように神輿を囲んで、十台ほどが競り合いを行なった。水しぶきを上げて絢爛に練るクライマックスに、詰めかけた観衆からも大きな歓声があがった。

「よみがえり」の熊野

「スタートを切るため、ど

伊曾乃神社のだんじり

は、その数から察せられるように、市内各地区を挙げての祭礼。奉仕の中には、海外から来た県内の留學生などの姿も見られ、氏子らと一緒に車を曳き、曳き唄に声を張り上げていた。

天災・人災の続く昨今の

日本に関して、「こころ」二年が、国を見つめ、これからのスタートを切る勝負の年だ」と言う九鬼宮司。その根底にある神道本来の姿をしつかりと捉え直しての展開に力を注ぐ意向を示した上で、「政治でも社会でも、バランスのとれた人が前面に出て、世代を作っていくと信じている。神道でも、本體をもつて役目を担う人が現れてほしい」と、若い世代にも期待を表した。



熊野本宮大社は、故地、大斎原から現在の鎮座地への遷座から百二十年を迎えたのをうけ、来春の「奉祝正遷座百二十年大祭」に向けて御社殿・神門の修復、奉納行事などを着々と進めている。

昨年の大雨による大洪水で、宿坊の役割を果たしてきた瑞鳳殿が壊滅するなど、同大社でも被害の爪痕が残る。それでも九鬼家隆宮司は、「よみがえりの熊野」を念頭に、「それぞれが意識を持って、それぞれの役目を果たして、この新たな時を進んでいきたいもの」と話す。

福岡県吉富町の八幡古表神社で八月四日、四年に一度の細男舞（くわしおのまい）・神相撲（かみずもう）が披露され、人形芝居の源流である神事芸能の古式が間近に見られる貴重な機会とあって、境内は各地から大勢の参拝者で賑わった。単人の霊を慰めるため宇

新刊 『きみがよものがたり』

本書は、国歌となった平安朝の古歌を題材にしたが、日本人の深層に伏流してきた「きみがよのころ」を現代に呼び覚まし、未来を担う子供たちに継承していくため、読み聞かせて送られた。



きみがよものがたり

「きみがよ」に紡がれた三十二音の「きみがよ」が調和した世界によってひも解きながら、縄文から連続と受け継がれてきた日本人の魂の奥深くに響きわたるように、

「ものがたり」は展開していく。「き」とは太陽の光と命の清明なる世界で、「み」とは月や星が輝く夜に自分自身と向き合う世界であり、「きみがよのころ」こそが、すべての生命（いのち）をひとつならりに捉える「日月の世界」の感性に根ざした日本人の心の原点なのだという。

佐神宮の放生会の際に木彫りの操り人形による傀儡子（くぐつ）が舞われたのが起源で、両手を挙げて万歳をするような単人の服属儀礼を思わせる所作が今に伝わる。同社には四十七体の傀儡子が納められており、細男舞・神相撲は国の重要文化財に指定されている。

当日は午前中に沖合に繰り出した船の上で細男舞・神相撲が奉納され、海人族とつながる祓えの神事であったことも伺わせた。夜は境内の神舞殿で勝ち抜き相撲の形式で次々と相撲の取り組みが行われ、服属儀礼を思わせるユーモアな所作に歓声もあがり、神相撲の最後は、「おんくろうさま」と呼ばれる全身が真っ黒の住吉神が登場。小兵の住吉神は一体で十一体の神々をまとめて相手に力のかもった押し合いを住吉神が制すと大

所作に歓声もあがり、神相撲の最後は、「おんくろうさま」と呼ばれる全身が真っ黒の住吉神が登場。小兵の住吉神は一体で十一体の神々をまとめて相手に力のかもった押し合いを住吉神が制すと大



住吉神が十一体の神々との押し合いで打ち負かす

南極 宗教事情

日本からおおよそ一万四千キロ離れた南極では、平和利用や領有権主張の凍結を定めた「南極条約」のもと、三十を超える加盟各国が五十以上の科学基地を設置している。研究者や観測隊員たちは極寒の地での過酷な環境の中、時には生命の危険と隣り合わせで生物・地質・気象・天文など多岐にわたる観測や研究を行っている。

そんな彼らの日々の生活を支えるべく基地には様々な工夫がなされており、宗教施設の設置もそのひとつだ。キリスト教文化圏の基地では敷地内に立派な教会を設けているところもあり、短い夏の間を訪れる観光客たちにも人気のスポットになっている。日本の南極観測の中心である昭和基地内には神棚がある

あることだ。

種明かしをしてみると、初代「宗谷(そうや)」から南極観測船の任を継いだ二代目が海上自衛隊所管の「ふじ」であり、艦名にちなんで富士山本宮浅間大社をお祀りしたのがそのまま引き継がれたからだ。

南極観測船は観測事業のための人員や膨大な物資の輸送に使用され、洋上観測や船上実験も行われている。南極では基地で生活する民間人の観測隊員とは異なり、観測の後方支援業務を担当する自衛官は、長い航海や滞在期間中のほとんどを艦内で過ごす。艦内の廊下に設けられた神棚は、毎日その前を行き来する彼らにとって常に身近な存在なのかもしれない。

ちなみに、静岡県富士宮市の富士山本宮浅間大社の境内には「南極の石」がある。これは「ふじ」に乗って南極観測に参加した第七次観測隊員よって奉納されたものだという。ご参拝の折にはこの石の前で、遠い南極とそこで過ごす隊員たちにはばし思いを馳せてみてはどうだろうか。

参考：国立極地研究所ウェブサイト (http://www.nipr.ac.jp/) 古川 麻実(東京)

投稿



二〇〇九年に就航した四代目南極観測船「しらせ」。三代目である「しらせ」と同名のため「二代目しらせ」とも呼ばれる海上自衛隊所属の最新鋭砕氷艦である。

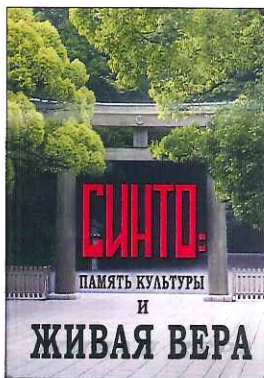


しらせ艦内観測隊公室(食堂)外の廊下にある神棚。横には「神棚」と書かれた照明用の電気スイッチが。左側照明の奥に見えるのが富士山本宮浅間大社の御神札。

ロシア語による神道論文集が出版される

このたび、神道国際学会ロシア事務所(所長モロジャコフ・エリゲーナ教授)から、このたび『神道：文化の記憶と生きている信念 (Shinto: memory of culture and lived belief)』というタイトルのロシア語の神道論文集が出版された。

この論文集は、もともと、ロシアの神道研究に尽力した故梅田善美氏の功績を讃えて刊行されたもので、現代のロシアにおける神道研究者、日本文化研究家の名前が並んでいる。



モロジャコフ・ワシリー教授(ロシア科学アカデミー東洋学研究所、博士、拓殖大学教授)による前書き「梅田善美氏を偲んで」を皮切りに、目次からその内容を探ってみると、以下のとおり。

「天皇神話と日本文化における精神空間」(Simonova-Gudzenko Ekaterina) 博士)、「風は神話として、風は日本古代文学のモチーフとして」(Brmakova Ludomila 博士)、「富士信仰」(Mescheriakov Alexandr 教授)、「猛烈な火とやさしい火：神道における火の神」(Rodina Stepan 博士課程)、「勧請された岩清水八幡宮の起源」(Dulina Anna 博士課程)、「神話で語る天信仰の歴史」(Fedanina Vladlena 博士)、「神に頼んで：戦国時代の大名の祈り」(Polikhov Sviatoslav 博士)、「柱と洞窟：神社の原型とトボス」(Kapranov Sergei 博士)、「日光東照宮の建築に見る神仏習合」(Spiridonov Gleb 博士)、「佐藤信淵(1769-1850)の教え」(Nakorchevsky Andrei 教授)、「神は歴史として：日本歴史学における神道」(明治維新から第二次世界戦争まで) (Molodtakov Vassil 教授)、「靖国神社の問題」(Molodtakov Elena 博士)、「神道と市場」(Sadokova Anastasia 教授)。

『青ヶ島の神々 ―へでいらほん流― 神道の星座―』

菅田正昭

青ヶ島は、「鳥も通わぬ」と謳われた八丈島の、さらに南六十七キロの絶海に浮かぶ孤島だ。わたしはこの島に昭和四十六年五月と四十九年一月と、平成二年九月と五年七月の二回在住した。一度目は役場職員として、二度目は青ヶ島村助役としてだったが、この本の内容のほとんどは前者の時代の体験に基づいている。

青ヶ島村の現在の人口は百七十人台。もちろん、全国最小村である。一度目のころは、同じく東京都に属する利島

(としま)村、御蔵島村と、その後、愛知県北設楽郡富山(とみやま)村と全国最小村の座を争ったが、平成以降は不動の一番である。富山村は吸収合併で今は豊根村となつているが、この奥三河の地には有名な「花祭り」がある。青ヶ島にも旧暦霜月の冬至のころ、「でいらほん祭り」と呼ばれる秘祭があったが、本書の副題はそこから来ている。

かつて青ヶ島は「牛とかんもと神々の島」と呼ばれたように、役牛と神々が人口より多かった。青ヶ島には明治七年の足柄県指定の「村社」二社があるが、宗教法人は神社、寺院を含めてゼロである。昭和三十一年まで衆参両院の国政選挙の選挙権を公職選挙法施行令の特例で奪



▽定価 二九四〇円(税込)▽創社社〇三(三九七〇)二六六九 菅田正昭(すがた・まさあき) 神道研究者、評論家。昭和二十年、東京生まれ。学習院大学卒。専門紙の記者などを経て、昭和四十六年五月から四十九年一月、平成二年九月から五年七月、青ヶ島に在島。その間、青ヶ島村助役などを務める。『古神道は甦る』『日本宗教の戦後史』『アマとオウ―弧状列島をつらぬく日本の霊性―』『第三の目―消された古代神「天目一箇命」の謎』(以上、単著)『日本の島事典』(編著)など著書多数。

マイ・ブック・レビュー

新刊紹介

※平成二十四年九月、十月を中心に刊行された神道および関連分野の新刊本を紹介いたします。

※学術書、一般向けの本、単行本・文庫本・ムックなど、内容と本の形態にこだわっていません。

※紹介は順不同

※定価はすべて税込定価

※出版社に付した番号は電話番号



● 国武将の謎に迫る！
▽武光誠 著
▽新書判「青春新書」、二〇二頁、九九〇円
▽戦国武将が神仏を味方に付けた理由とは？
▽青春出版社〇三(三三二〇三)五二二一

● 学ぶ生命の教え
▽渡辺勝義 著
▽A5判、二七八頁、二八三五円

● 出雲大社のすべて——日本の神々のルーツ、60年ぶりの大遷宮！(別冊宝島)
▽武光誠 監修
▽B5変形判、一二七頁、九七九円

● ゼロからわかる神社入門——日本人なら知っておきたい神社のすべて (Gakken Mook)
▽三橋健 監修
▽A4変形判、一〇五頁、七八〇円

● 一度は訪ねたい20社。神社の種類、ランキングも
▽学研パブリッシング〇三(六四三二)一〇〇二

● ニッポン千年神社——日本人のしなやかさの原点をひもとく
▽A4変形判、八〇〇円

● 神道を問い、日本伝統の文化をもう一度見つめ直す
▽徳間書店〇四八(四五二)五九六〇

● 諏訪大社と武田信玄 戦

● 諏訪大社と武田信玄 戦

● 諏訪大社と武田信玄 戦

【新刊】『訓読註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀』

天皇一代一度の国家祭祀である大嘗祭。その祭祀と儀式の全貌を示す、もともと古くかつ確かな文献は『儀式』(貞観儀式)だとい

う。本書は、皇學館大学神道研究所が長年にわたって取り組んできた、現存本『儀

踐祚大嘗祭儀

皇學館大学神道研究所 編

式』の巻二・三・四、すなわち「踐祚大嘗祭儀 上・中・下」の訓読と注釈研究の成果を示す。訓読文を右ページに、それに対応する底本原本を左ページに掲げる。また、校異や小見出しを上に、注釈を下段に配する。これによって、その訓読文の部分については、見開き内で収まることになり、見渡しやすく、読み進めやすくなっている。さらには、理解に資する

ための参考図や注釈索引を本書末に置いている。底本としては天保五年の版本を用いているが、その他の写本などの対校も行なっている。訓読文は儀式撰上当時の読み方をできるだけ再現。その訓の根拠も注釈に示している。

皇學館大学「創立百三周年」「再興五十周年」を記念しての出版。

B5判、八九〇頁、一五七五〇円(税込)。思文閣出版〇七五(七五二)一七八一。



日本山岳修験学会の會長などを歴任した著者が、日本で広く行なわれてきた山岳信仰、そして修験道の概要を丁寧に、わかりやすく解説する。その概説のうえに立って、山伏や比丘尼による唱導や勸進活動を紹介していく。

テーマは「山岳信仰と修験道(日本の山岳信仰：修験道の峰入、護摩、救済儀礼、ほか)」「吉野の修験道と蔵王権現信仰の伝

播(吉野の修験道：吉野、野、熊野、伊勢、羽黒、彦山、白山、本山派、当山派、児島五流など)」「そこからさらに、唱導と勸進活動を通して、修験道および信仰が各地の霊山や地方へ伝播し、定着していった経過などを解明していく。

地方霊山：当山正大先達三輪山平等寺、ほか」など。

A5判、三四〇頁、三四六五円。法蔵館〇七五(三四三二)〇四五八。

【新刊】『修験道——その伝播と定着』

宮家 準 著

● 民俗芸能学会
平成二十四年度大会を十一月十八日、東京都新宿区霞ヶ丘町七ノ一(明治神宮外苑)の日本青年館(六階会議室)で開く。

十月四十分から十二時十分まで研究発表(三題)。十三時から十六時半までシンポジウム。テーマは「震災地における民俗芸能再生に向けて——現状と課題」。岩手、宮城、福島、東京のパネラーにより、報告と討論が行なわれる。司会は小島美子・国立歴史民俗博物館名誉教授。

● 日本民俗音楽学会
第二十六回東京大会を十二月八、九日、東京都目黒区大岡山の東京工業大学で開く。

事務局は東京都立川市の国立音楽大学・山本研究所内。

● 神道宗教学会
第六十六回学術大会を十二月一、二日、東京都渋谷区東の國學院大学で開く。

事務局は國學院大学神道文化学部内。

学会・学術情報

日本文化A Iが講演会を開催 同志社大学で

日本文化を総合的に研究することを目的とする日本文化A I(代表 山内久司・朝日放送顧問)は十月十四日、同志社大学で第八回講演会を開催した。同団体はこれまで女性・芸能・事実と伝承・メディア・国際政治などを主なテーマに取り上げてきた。

講演に先立ち、参加者有志で京都の下鴨神社を参拝した後、境内にて丸山頭徳・花園大学教授が賀茂氏の背景や同社鎮座の意義を風土記などを引きながら説いた。同志社大学に会場を移し、まず鈴鹿千代乃・神戸女子大学教授が「古事記の構造」をテーマに講演。皇妃の出自から欠史八代の歴史に光を当てるなど大和の原像に迫りつつ、古事記に一貫して流れる修理固成の意図を明らかにした。さらに丸山頭徳氏が「古代文学にみる日中の罪と罰の違い」をテーマに昨今の東アジア情勢を解説した。ここで、神戸神事芸能研究会の西川猛氏が「秋風の辞」を筑紫舞で披露。同研究会を主宰する鈴鹿氏は筑紫舞に伝承されるケガレを破る所作について解説を加えた。最後に、山内久司氏が「西遊記にみる中国人の死生観」をテーマに講演して締めくくった。



神事芸能の筑紫舞も厳かに披露された

編集後記

▼ついこのあいだまで、いつまでも残暑が続くなあ、とげんりしていたら、一気に秋が深まり、朝晩めっきり寒くなりました。稔りの秋に、しばしば「一時(とき)を「秋」と書いて「とき」と読ませるのを思い出して、単純にこれは稔りの季節だからと思っていました。よく調べてみたら、もともとは三国鼎立のときの諸葛孔明の故事に由来し、「危急存亡の秋(とき)」とあり、生滅の瀬戸際、岐路に立たされている秋(とき)だそうなんです。もちろん、そこから、収穫という一年で最も大切な時季というところで、重大な時を秋(とき)と表すことにもなりました。稔りの秋を味わいながら、しかし今はたしかに、国も、それだけでも、生き延びるか滅びるか、危険存亡の秋だと気を引き締めました。と云っているうちに間もなく師走です。(タ)

▼この号が、私が神道フォーラムの編集に携わる最後になりました。神道フォーラムだけではありません。年が変わると同時に、事務所からも姿を消します。会の設立以来十八年、夫・梅田善美が理事長、私が事務局長と、二人三脚で仕事をさせていただきました。十八年といえば、新生児が大人になるほどの年月です。豊かな時間をすごさせていただきました。このご縁に心から感謝いたしますとともに、神道フォーラムを読んでもくださった皆さまのご多幸をお祈りいたします。(セ)